

大学と地域の連携でおこなう、ひきこもり・不登校学生への就労支援

著者名(日)	和田 修
雑誌名	教養研究
巻	18
号	3
ページ	61-75
発行年	2012-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1265/00000360/

大学と地域の連携でおこなう、 ひきこもり・不登校学生への就労支援

和田 修

1 はじめに

大学における不登校・ひきこもり学生に対する問題は、目良（2010）や水田ら（2011）の全国的な調査により、その実態が明らかになりつつある。水田ら（2011）の調査によると、大学生の不登校が全国の大学生約280万人中2.0～8.1万人、ひきこもり状態の学生が0.7～2.9万人と推測している。更に学生相談機関への調査において、87.5%もの相談機関がひきこもり・不登校学生への支援がうまくいっていないと答えている。このような現状に対して、全国的に積極的な支援が行われるようになりつつあり、支援事例も多く報告されている。

その中でも、積極的に支援をおこなっている神奈川工業大学（最上他、2008）や九州大学（峰松他、2003）においては、ひきこもりからの「回復」に支援の重点が置かれており、グループなどを活用して親密な仲間関係を作ることを目標設定してある。和歌山大学（池田他、2006）においてピア・グループを活用したボランティア活動への参加、そして就労支援という取り組みをおこなっている。大学におけるひきこもり支援で就労を意識した支援については現在のところ和歌山大学の取り組みだけである。

ひきこもりの第一人者である斎藤環（2002）は、ひきこもりの治療のゴールについて、「就労」をゴールと考えないと述べており、その理由の一つとし

て無理に就職をした際に、職場内での対人関係の問題や、厳しい労働環境によって、本来持っていた本人の気力を潰される可能性がある」と指摘している。また、斎藤はひきこもりの就労については十分なトレーニングが必要を訴えており、ひきこもり体験者の就労には十分な練習および準備期間が必要であると述べている。筆者の在籍するX大学においては、数年前から長期的ひきこもり・不登校学生の支援プログラムをおこなっており、グループワークから大学祭での模擬店出店などを通して復学へのサポートを定期的におこなっている（和田、2011）。その結果、13名のひきこもり・不登校学生が復学を果たしている。しかし、高学年で復学を果たした学生から将来不安を相談されるケースが増え、低学年の復学学生でもアルバイトへの不安を相談されるケースが確認された。ひきこもりを体験した当事者の特徴の一つとして、自分の周囲の同じ年齢の人と対比して、自分が同じように出来ていない部分に着目しがちであり、「同じように出来ていない自分」に失望するという特徴が挙げられる（石川、2007）。大学においても、復学して通常通りに大学に通うようになると、半数以上の学生がアルバイトをしており、学年が上がると嫌でも就職活動の波に巻き込まれる現実気づかされるのである。そのような相談を受け、ひきこもり・不登校を体験した学生にとって、「復学」は確かに自身の発達課題をひとつ乗り越えたことになるが、次には「就労」という更なる課題が待ち受けており、これらの学生の心の成長・成熟を促すための継続的な援助が必要であると考え、ひきこもり・不登校学生を対象とした就労体験プログラムを実施するに至った。

本稿では、就労体験プログラムの経過とプログラム終了後の効果について考察していきたい。

2 事例の概要

(1) 就労体験プログラムの特徴

X大学は住宅街と商業地域に囲まれた場所に立地し、キャンパスから歩いて

5分の所に古くからある商店街がある。現在は近くにスーパーなどの大型店舗が出店したため、商店街自体の利用客はそれほど多くなく、また高齢者が多く見られる。X大学では、以前より授業の一環としてこの商店街において、学生が空き店舗を借りてカフェを開設したり、商店街と共同で七夕祭りをおこなったり、定期的な相互交流が行われている。商店街においては、大学の学生への理解もあり、昔ながらのアットホームな雰囲気の商店街である。今回の就労体験プログラムにおいては、学生にとっても親しみのあるこの商店街を就労体験の場として選んだ。

就労体験プログラムは学生相談室が中心となっておこない、各店舗との連絡、学生の事前指導およびカウンセリングに1ヶ月の準備期間を置いた。その後、参加学生は1ヶ月間の就労体験をおこなった。体験期間中は週1回のペースでカウンセラーと参加学生の定期面接を実施して、学生の状況把握に務めた。また、協力店舗の店主とも週2回話し合いの場を持ち、参加学生の様子についての意見交換をおこなった。

就労体験プログラムの参加者は、X大学でおこなわれている、ひきこもり学生支援グループの参加者で、すでに復学している学生を対象としている。全員ひきこもり、不登校歴があり対人不安が強い学生で、これまでアルバイトなどの就労体験はない。参加にあたっては、カウンセラーとの面接において本人が就労体験に意欲を示した学生に、実際に商店街見学などに行かせ、具体的な就労体験の内容を伝えて、最終的に参加者本人に参加の有無を決定させた。当初は7名の参加希望があったが、具体的な話を進めていく段階で3名が辞退。最終的に4名の男子学生が就労支援プログラムに参加することになった。

参加者のプロフィールは以下の通り。

Aくん（6年）	不登校／対人不安・就職不安	肉屋
Bくん（3年）	ひきこもり／極度の対人不安	野菜・果物屋
Cくん（2年）	ひきこもり／入学直後から孤立傾向	野菜屋
Dくん（2年）	不登校／対人関係がうまくいかない	惣菜店

(2) 支援プログラムの経過

1) 就労体験店舗との話し合い

今回の就労体験において最も重要なのが、就労体験の受け入れをおこなってくれる店舗である。通常の営業活動の中に就労経験のない学生を入れてもらい、指導をして頂くことは、受け入れ店舗側にとっても大きな負担である。また、今回の体験学生の全員がひきこもり、不登校歴のある学生であり、心理面でのサポートを要することも事前に伝えなければならない。

準備にあたって、カウンセラーが商店街へ出向きまずは就労体験を受け入れてくれる店舗探しから始めた。そして、店舗側が受け入れても良いという反応があった場合、各店舗の店主にひきこもり・不登校学生の実態について説明をおこない、また当事者の学生達が大学祭やグループ活動を通して就労への興味と不安とを半々に持っており、その就労への第一歩目のサポートをお願いする旨を伝えた。複数の店舗が「自分たちにはそのような難しいサポートは出来ない」と難色を示したが、数件の店舗が気持ちよく承諾してくれ、今回の就労体験の現場として提供してくれることとなった。

次に、各店舗において店主と業務内容を確認しながら、就労体験のない学生でも出来そうな、①単純な軽作業（荷物運びや掃除など）を選択、第1段階とした。また、第2段階として、②店主の指示を仰がないと出来ない作業（倉庫整理や陳列など）を選択。第3段階には③参加者自身の判断と積極性が必要とされる作業（店頭販売や配達など）の3段階を選択、目標設定とした。作業を3段階に分けた理由として、就労体験開始直後は参加者の緊張感が高いことが予測でき、ストレスレベルも上がることが予想されるため、出来るだけ黙々とこなせる作業を中心にした。次に、個人差はあるだろうが「職場」という空間に慣れてきた段階では、参加者が苦手とする店主とのコミュニケーションを中心に据え、店主との会話で作業が進むように配慮した。最後の段階では、自らが考え、積極的に作業するような仕事を準備してもらい、参加者が達成感を感じるような作業内容としている。

この作業内容決めにおいても、各店主が店舗終業後に話し合いに応じてくれ、「こんな作業はどうだろう」といろいろなアイデアを出してくれた。この話し合いによって、各作業段階で参加者にどのような事が求められているのかが、具体的に店主に伝わったことで、店側も参加学生とどのように向き合ってよいのか具体的なイメージが出来たという。

2) 参加学生の目標確認

参加学生である4名はカウンセラーとの定期面接をおこなっており、その面接において就労体験への意志確認および目標の確認をおこなった。Aくんは、順調にいけばあと1年で卒業できる予定であり、本人も「目の前に就職が迫っている」と感じている。これまでに何度かアルバイトをしようと考えたが、実行に移せた事はなかった。「実際に(アルバイト先へ)電話をしようとする、怖くなって途中で電話を切ったりした」と本人が語るように、働くという事に漠然とした不安を抱えていた。Aくんは「今回の体験で少しでも就労に対する不安をなくす」ことを目標とした。

Bくんは、対人不安が強く、ひきこもり支援プログラムにおいても、グループに馴染むまでに一番時間のかかった学生だった。これまでアルバイトをしよう等と思ったこともなかったが、昨年より大学へ通うようになってから、やはり将来のことが心配になってきた。「大学を卒業しても働けないかも」という不安が強く、今回のカウンセラーの就労体験の提案に「勇気を出して参加することにした」と語っている。Bくんの目標は「初めて接する人と少しでも話が出来るように頑張ること」とした。

CくんとDくんは、入学直後から友達が出来ず孤立していた学生で、前年度の大学祭での模擬店出店体験からグループに馴染めるようになった。今年はぜひアルバイトをやってみたいと思っているが、もともと対人関係が苦手なため、なかなか先へ進めない状況だった。そこで、今回の就労体験を活用して「働くという体験をして、アルバイトへの自信につなげたい」という目標を設定した。

二人共、学年が2年生のため、まだ就労などについては、特に考えていないという。

3) ロールプレイング (事前実習)

参加者4人の共通点として、「働くことへの不安」「初対面の人と話すことが苦手」「緊張しやすい」「自信がない」が挙げられ、就労体験初日にかなり緊張することが予測された。そこで、就労体験の1週間前からグループで初日を想定したロールプレイをおこなった。最初に自己紹介をおこない、適切な指示を受けられるように店主に質問する方法。さらに、不安解消策として全員で大きな声を出す練習をおこなった。最初は大きな声を出すことに抵抗があったようだが、回数を重ねるごとに少しずつ大きな声が出るようになってきた。就労体験の前日には何人かの学生に協力してもらい、見知らぬ学生相手にロールプレイをおこない翌日に備えた。A、C、Dくんの3人はロールプレイを通して緊張感の緩和に繋がったようだが、Bくんは最後まで相手の顔を見ることが出来ず、声もなんとか出ている状態だった。

また当日の緊張を少しでも緩和させるため、全員で明日から就労体験の現場となる商店街へ行き、それぞれの店舗見学と挨拶周りに行った。それぞれの店舗で5分ほど滞在して参加学生全員の紹介をおこなった。どの店舗においても「明日からよろしくね」「明日、待ってるからね」と店主から声をかけてもらい、参加者も少し安心した様子だった。

4) 就労体験初日

就労体験初日は、9時に各自でそれぞれの店舗へ行くことになっており、時間も9時から12時までの3時間と短く設定しておいた。カウンセラーは初日のみ、きちんと来ているか確認のため各店舗を回ったが、4人全員が時間前に店舗に到着しており、9時には作業が始まっている状態だった。カウンセラーから見ると、いつもより頑張って笑顔を作って作業をおこなっている参加者の

姿が確認され、動きもぎこちなく見えた。気になっていたBくんは、笑顔こそ見せないが真面目な顔つきで作業をおこなっていた。

就労体験初日は、12時で終了。その後、午後から各自カウンセラーとの個別面接をおこなった。Aくんは「最初、すごく緊張したけど、おじさん(店主)があれして、これしてと言ってくれるので、それをやっていたら12時になっていた。」と比較的元気そうな様子だった。Bくんは「朝からお腹が痛くてもう止めようかと何度も思ったんだけど、『明日、待ってるからね』と言ってくれたお店の人に悪いからなんとか行きました。でも、挨拶がうまく出来なくて…」と面接時でもまだ緊張感が残っている様子だった。カウンセラーが「明日はどうする？」との問いに、しばらく考えた後「行きます。」とだけ答えた。Cくんは「最初の挨拶がきつかった。」と言い、理由を尋ねたところ「昨日会った店主さんが配達に行っていて、知らないおばさんと二人だったので、実習前に練習した挨拶と質問(何をしたら良いかを尋ねる)がなんとか出来ました。でも居心地が悪かったです。」と答え、作業自体はきつくなく、黙々と野菜の袋詰めなどをおこなった。Dくんは惣菜店だったため、厨房で働く従業員に紹介され「みんなに見られているようで、すごく緊張しました。」と言い、さらに「みんな忙しそうで、一度(作業の)やり方を教えてもらったんだけどよくわからなくて、もう一度聞けなくてじっとしていると、おじさん(店主)が声をかけてくれて助かりました。」と、作業自体はそんなに大変だと思わなかったが、厨房の雰囲気やや圧倒された印象を受けた。

5) その後の就労体験

その後、就労体験は翌週から9時から15時となり、各店舗で参加者の様子を見ながら店主が作業の段階を上げていった。カウンセラーは店主と週2回ほど参加者の様子について話し合いをおこない、参加者が就労体験をおこなっている時間には姿を見せないようにした。また参加者とは週1回のペースで定期面接をおこない様子を伺った。最終的に4名共に週5日の就労体験を1ヶ月続

けて就労体験を終了した。なかには就労体験の継続を望む学生もいたが、店舗側の負担も考え、当初の約束どおり1ヶ月で終了した。

－Aくんの評価と感想

一番適応が早く3日目には第2段階へ進み、2週目には第3段階へ進んでいた。もともと細やかな性格で話好きな所があったので、店主ともすぐに馴染み、積極的に作業をすることが多かったという。また頼んだことを几帳面にこなすので、食品店としては安心して任せられたと好評価を得た。最後は店主が信頼してくれ、ご近所の配達まで任されていたという。一人暮らしだったAくんに、その日残ったコロッケなどを持たせてくれ、Aくんも店主を慕っており、本人はもう少しこの店で働きたいという気持ちがあったようだ。

Aくんは就労体験を振り返り、「自分は引込み思案なのだと思っていたが、そうではないことに気がついた。店番をしていると、2～3回買物に来た高齢のお客さんが自分の名前を覚えてくれ、自分もお客さんの名前を覚えようと頑張った。何度かそのお客さんと世間話もして嬉しかった。また、店主さんから信頼され色々なことを任されたことが自信になったと思う。これまでは、働いたら失敗するとか怒られるというイメージしかなかったが、この体験で自分の神経質なところが意外に役に立つのだと気がついた。」

－Bくんの評価と感想

当初心配していたように、最初の数日間は腹痛に悩まされ、3日目には休んでしまい、一時は就労体験の中止も考えたが、4日目には休まずに出て来た。動作もぎこちなく、作業も慣れるまで時間がかかったが、コツコツと真面目にやる姿を店主が評価してくれた。1週目は自分から喋ることはなく、すべて言われることをやっていただけだったが、1週目の終わりに店主が「今週はよくがんばったな。」と言って帰りにみかんを持たせてくれた時、本人が初めて笑顔を見せてくれたという。2週目は小さい声だが「終わりました」「次は」と

尋ねて来るようになり、第2段階へ上がった。店主は朝、もう1時間早く来て商品を並べる手伝いをして欲しいと頼み、翌日から1時間半前に来るようになった。最初はひとつひとつ並べ方を教えていたが、次第に自分一人で出来るようになり、最後は店の半分を任せるようになっていた。残念なところは、一緒にお昼ご飯を食べていたが、店主が話かけても「はい」か「いいえ」しか答えず、あまり会話が弾まなかったという。

Bくんは就労体験を振り返り、「3日目で休んだ時は『もう辞めよう』と思ったが、休んだ日にはみんな心配して僕の家まで来てくれ、自分の店の三件先にCくんの働いている店があり、同じ野菜を売っているCくんには負けたくなかったので、頑張って4日目に行きました。1週間が終わった時に店主さんがくれたみかんがすごく嬉しかった。その日、家へ持って帰ったら母親がすごく喜んでくれ、なんか給料をもらったような気分になった。その時に働くってこういうことなんだと、すこし分かったような気がした。翌週にもう1時間早く来てと言われた時は、自分もすこしは役に立ってるんだとすごく嬉しかった。しかし、なかなか並べ方を覚えられず大変だったが、この頃には不思議と緊張感はなくなっていた。自分はやっぱり人が苦手で店主に勧められたが最後まで店頭販売はしなかった。自分には商品を並べたり、裏の倉庫を整理したりすることが向いていると思った。」

Bくんは、もともと負けず嫌いな一面があり、グループでゲームをやっているでも、真剣に勝負に挑むところがあった。今回の体験では、Bくんのそんな一面と仲間意識とが辞めずに最後まで続けるという結果に結びついたと思われる。

—Cくんの評価と感想

Cくんの行った野菜屋は夫婦でやっている店舗で、店主が仕入れ、配達などで出ることが多く、初日も奥さんと二人で作業をおこなった。明らかに緊張した様子で、自己紹介はしたがなぜ自分がここに来たのかの説明が出来なかった。最初は小声で「はい」「いいえ」くらいしか答えなかったが、奥さんと二人で

昼食を取るようになった2週目から、いろいろ喋ってくれるようになった。喋るようになってからは、「ここはどうしたら良いですか？」等と尋ねてくるようになり、「重いから僕が運びますよ」という優しさも見せてくれた。自然に第2段階となり、店頭販売をしている際に店主がお客とお金のやり取りをしている間にさっと商品を袋に入れたり、自ら商品の補充をしてくれるようになった。最後の週には一緒に「いらっしゃいませ」「ありがとうございます」と大きな声で言ってくれるようになり、店主的には第3段階をクリアしていると評価した。

Cくんは就労体験を振り返り「最初の日ほうまく喋れず、気まずい雰囲気だった。奥さんもあまり話しかけてくれず、ずっと黙って仕事をしていた。逆に仕事をしていると不安が和らいだ。奥さんが何も言ってくれなかったのも、なにか迷惑をかけているのでは？と心配で、何を喋って良いのかも分からなかった。翌週からは時間が長くなるのが苦痛だったが、翌週に行ってみると、奥さんが昼食を用意してくれており「一緒に食べよう」と声をかけてくれたのが嬉しかった。昼食の時に、家族のことや大学のこと等を聞かれ、話すうちに奥さんとも打ち解けるようになり、気持ちが一気に楽になった。一緒にお昼を過ごすうちに自分もなんか、その店の一員になったような気がした。仕事自体は単純な作業が多かったので特に問題はなかったが、接客は勇気が出なくてなかなか出来なかった。しかし、最後の週にはお客さんが『お兄ちゃん、がんばるね』と声をかけてくれ、少しずつだが接客にも挑戦した。」

—Dくんの評価と感想

惣菜店だったDくんは、当初はそのスピードや忙しさになれない様だったが、もともと器用だったのですぐに要領を得て、2週目には包丁を使う仕事を、3週目には油を使う仕事も任された。最初はあまり喋らない学生という印象だったが、作業を通して段々と周囲のスタッフとも喋るようになった。気をつく性格で、慣れてくると手の足りない場所に自ら行って「これしましょうか？」と

積極的に動けるようになった。店主も同じスタッフからも好評価を得ている。

Dくんは就労体験を振り返り「最初はバタバタみんな忙しそうに働いており、自分も頑張らなければと思ったが、思うように作業が覚えられず失敗も数回あったと思う。でも店主さんがその都度いいねいに教えてくれ「大丈夫、大丈夫」と言ってくれたので、その声が救いだ。頑張ってるよ」と「うまくなったやん」とスタッフさんからも声かけしてもらい、とても嬉しくなった。自分はとっさの判断とか苦手と思っていたが、店の流れに慣れてくると「あ、今これをしなきゃ」というのが分かるようになり、何でも経験なんだと思った。仕事が終わって帰る時に、みんなが「おつかれさま。また明日ね」と声をかけてくれることがとても嬉しかった。」

3 考 察

(1) 集団同一性感覚の確立

本事例の参加者である4人とは、前年度に大学祭の模擬店出店を一緒におこなっており、筆者は4人の長所を十分に把握していたつもりである。しかし、その長所以上に懸念の要素として「働くことへの不安」「初対面の人と話すことが苦手」「緊張しやすい」「自信がない」等が挙げられる。自身が守られた空間中であると、それぞれの良さを発揮するのだが、いざ知らない環境の中へ入ると不安と緊張に支配されてしまい、自身のネガティブな部分が大きく出てしまう。そこで、筆者は出来るだけ刺激の少ない状態で、また彼らは1年間グループとして一緒に活動しており、そのグループ自体が彼らの安全空間となっているため、お互いに近い空間で就労体験をしてみてもうどうだろうか考えた。筆者はこの4人に「集団同一性感覚」の確立を目標とした。「集団同一性感覚」とは、グループ活動等を通して、自分自身に安心な集団への所属感が生まれてくると、仮にそのグループメンバーが近くにいなくても、一緒にいる時のような「連帯の情感(守られている感)」や「友情の感覚」が持てる状態のことを

言う。この感覚が確立すると「心的安全空間感覚」が広がり、自分のまったく知らない場所においても安心して活動が可能になる。

「集団同一性感覚」の確立の手法として、まずお互いに近くにいる感覚を重視し、同じ商店街の近くの店を提供した。実際に初日なども、まずは4人で集まり、それから各店舗へ行ったという彼らの行動は、少しではあるが初日の緊張感緩和につながり、また誰かが居てくれるという安心感に繋がったと思われる。Bくんが3日目に体調不良で休んだ際も、心配した他の3人がBくんのもとを尋ねており、その仲間感覚がBくんの4日目に出て来た原動力になっていると推測する。そして、就労体験が進むに連れて4人はそれぞれ働く店の店主やスタッフとの間に心の交流が生まれ、最終週にはそれぞれの店に自身の所属感を感じたと振り返りで述べている。今回の就労体験では自身が所属していた集団から離れ、新たな集団（職場）との関係を築くことに成功している。参加者にとって新たな集団に属した体験は、彼らの「心的安全空間感覚」を確実に広げ、自分自身への自信につながったと思われる。

(2) 段階的就労体験

今回の就労体験において筆者が最も気を遣ったことは、参加者の4人に何らかの成功体験や自己肯定感が獲得できる体験にすることであった。参加者は全員、就労に対する不安を抱え、自分自身に自信がないと訴えており、体験による大きな失敗や挫折は、ひきこもりの状態へ引き戻してしまう危険性も考えられた。そこで、認知行動療法でもよく用いられる、作業を複数段階に分けて一段ずつステップアップする手法を採用した。第1段階は単純作業になっており、初日に起こるであろう不安や緊張感を単純作業に集中することによって相殺することを目的とした。実際に初日がうまくいかなかったCくんは、作業をすることで気が紛れたと振り返っている。そして、第2段階においては、店主とのコミュニケーションを重視した。参加者としては黙々と作業をしている方が失敗も少なく、不安も軽減されると思われるが、慣れてきた段階であえて指示を

仰ぎ、自らも積極的にコミュニケーションをとって仕事をするという、基本的なスキルを獲得することを次の目標とした。積極的なコミュニケーションの得手不得手には個人差があり、実際にAくんは3日でクリアしたが、Bくんは2週目までかかった。しかし、本人の心の安心感が伴わずに積極的なコミュニケーションを求めることは当事者に無理を強いることになり、うまくいかない場合には、自己否定におよぶ可能性も考えられた。それぞれ個人のタイミングでステップアップしていったことは安心感の獲得という意味で重要だったと思われる。第3段階においては、積極性はもちろんのこと、状況把握や問題解決力が求められる体験となっており、当初は全員がクリア出来るとは想定していなかった。しかし、店舗との信頼関係が生まれると共に、時期の前後こそあれ参加者の自発性が見られるようになった。心配していたBくんも、自分自身が出来ることの範囲内で積極的に自身の長所を発揮できたと思われる。Cくんも控えめながら、店主が他の作業をやっている間に、自身が出来ることを積極的にやる等、しっかりと状況把握が出来ていたと店主から評価を受けている。

段階的就労体験によって、参加者は就労に必要な挨拶に始まる「相互コミュニケーション」「積極性」「状況把握力」「問題解決力」、そして「自身への信頼感」を学んだと言える。しかし、その根底にあるのは「心的安全空間感覚」であり、参加者を安心させ、コミュニケーションを促し、積極性を引き出してくれた各店舗の方々のおかげであると言える。

(3) 地域との連携

コミュニティ心理学においては、その研究目標であり臨床上の実践目標として「人と環境の適合」を述べている。「人と環境の適合」とは、「生活体としての人が、物理—社会的要素を含む生活環境との間で、調和した機能的なかわりが持てる状態にあること」としており、「調和した機能的なかわり」については「欲求、価値、能力の上でそれらが充足されたり、一致したり発揮される感覚である」と述べている(北島、1995) 今回の就労体験において、参加

者は「働きたい」という「自己実現欲求」を、商店街という環境の中で生まれ、充足させていったと考えられる。これまで大学と密接な関係を維持してきた商店街と、就労体験を試みたいという大学学生の融合は、まさに「調和した機能的かわり」そのものではないだろうか。今回の就労体験を通して、多くの店主は大学生のひきこもりという現実を知り、それが地域で、商店街の中でも支援可能であることを知ったと振り返る。そして、数名の店主より今後も継続的な支援の受け入れを表明して頂けた。現在では、地域でひきこもり支援に協力してくださる有志の方々と北九州地域ひきこもりセンターとの共同で「縁が輪ネットワーク」という集まりが結成されている。このネットワークでは、就労体験に店舗を提供してくれる方や、アルバイトとして雇用してくださる方などが集まり、定期的に情報共有をおこなっている。

このようなコミュニティにおける連携は、ひきこもりに対する正しい情報を提供する上でも重要であり、正しい情報の提供によって、地域における支援の賛同者を募る上でも今後さらに重要になってくるものと思われる。

4 最後に

今回の就労支援プログラム実施にあたり、商店街において就労体験の場所として店舗を提供して下さり、また参加者に対して暖かい眼差しで見守って下さった店主および店舗スタッフの方に心より御礼申し上げます。

後日、商店街でカフェを開催している学生と合同で、お世話になった商店街の方へ豚汁を振舞うという企画が行われました。その際には、お世話になった店舗の方が全員参加して下さり、参加学生に語りかけてくださいました。

その後、Aくんは卒業して無事就職。Bくんは卒業後に自らの意志で専門的なスキルと学びたいと職業訓練校へ入学。CくんとDくんはアルバイトを始め現在に至っている。

参考文献

- 浅田彩子 2010 ひきこもり当事者の「居場所」支援に関する分析—家族・当事者・支援者の視点から—。人間文化研究科年報、25、193-203。
- 池田温子・畑山悦子・塩谷昭子・宮西照夫 2006 和歌山大学のひきこもり支援プロジェクトとその成果。CAMPUS HEALTH、43(2)、101-106。
- 石川良子 2007 ひきこもりの〈ゴール〉「就労」でもなく「対人関係」でもなく。青弓社。
- 北島茂樹 1995 人と環境の適合。臨床・コミュニティ心理学—臨床心理学的地域援助の基礎知識—、22-23。
- 小谷英文 2005 集団安全力学。現代のエスプリ別冊「心の安全空間」、106-120。
- 目良宣子 2010 日本におけるひきこもりの現状と対策について。発達人間学論業、13、99-106。
- 峰松修・福盛英明・一宮厚・明石久美子 2003 学生相談における「関係者支援」の試み(1)Family Support Group：保護者をいかに支援するか。CAMPUS HEALTH、40(1)、344-345。
- 水田一郎・石谷真一・家住伸子 2011 大学における不登校・ひきこもりに対する支援の実態と今後の課題—学生相談機関対象の実態調査から—。学生相談研究、32、23-35。
- 最上澄枝・金子糸子・佐藤哲康・布施晶子・市来真彦 2008 自ら助けを求めず潜在している学生に対する学内協働による取り組み—欠席過多学生対応プロジェクトを通して—。学生相談研究、28(3)、214-224。
- 斎藤環 2002 「ひきこもり」救出マニュアル。PHP 研究所、417-419。
- 和田修 2011 大学キャンパスでおこなう、ひきこもり・不登校学生支援プログラム—復学までの過程。社会文化研究所紀要、68、129-146。
- 山本和郎 1986 コミュニティ心理学—地域臨床の理論と実践。東京大学出版会。